

Title	十九世紀初頭のイングランドにおける労働移動の現象について：アーサー・レッドフォードの研究「イングランドにおける労働移動，一八〇〇年-一八五〇年」を中心として
Sub Title	On labour migration in England of the nineteenth century : a review of Arthur Redford's, "Labour migration in England, 1800-1850, 1926"
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.1 (1965. 1) ,p.60(60)- 73(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19650101-0060
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650101-0060">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650101-0060</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十九世紀初頭のイングランドにおける

労働移動の現象について

—アーサー・レッドフォードの研究「イングランドにおける労働移動、一八〇〇年—一八五〇年」を中心として—

飯田 鼎

イギリス産業革命にかんする歴大な量の研究の中で、労働人口の移動にかんするものは意外に少ない。初期の機械制工場にみられる深刻な労働力不足の現象、農村から都会への労働者の移動がいかにしてひきおこされたかを追求した研究として、われわれはすでに、一九二六年のレッドフォードの研究に接することができるのであるが、この度、この名著が再版されたのを機会に、あらためて本書の学問的価値を探ってみるのも無駄ではないと考える。

しかしながら、今日、われわれが、とりわけこの書に新鮮な魅力を感じるのは、現代のわが国における深刻な労働力不足の問題、その結果としての労働力の流動性の浸透というさしせまった問題に遭遇して、いわゆる「賃労働」の創出と移動が、十九世紀初頭のイギ

リスにおいてどのような経過を辿ったかを明らかにしたいがためである。「出稼ぎ型」は半農半工と呼ばれたわが国の賃労働の存在形態も、イギリスの場合にもみられたのではないかという素朴な疑問も生じてくる。

著者レッドフォードによれば、一八五一年までに、英国の人口の三分の一は、人口二〇、〇〇〇人以上の七〇の町に住んでいたといわれ、十九世紀初頭のイギリスにおける人口の増加はつぎのような二つの主要な問題に要約しうる。(一) 田舎の人口の増加の仕方、(二) 大都市の発展および人口の増加の原因。著者は前者については、この研究の範囲外であるとし、後者については、とりわけアイルランド人の流入を非常に重視しているのが印象的である。

産業革命期における労働力不足の現象は、イングランドにおいても例外ではなく、著者は、ジョージ・アンウインの名著「サミュエ

ル・オールドノウとアークライト家」に依拠しつつ、十八世紀末期の賃労働の状態についてつぎのようにその特徴を指摘する。すなわち初期の工場の場合、——この場合、オールドノウの工場であるが——

成人労働者の大部分は、「渡り歩きをする労働者」(Itinerant Labour)に依存し、一七九一年から一七九四年までの間に雇用された六〇、〇〇〇名以上の労働者の名前が記録されているといわれる。しかし、一度に三〇〇人以上雇われたことはなかったといわれる。いかに労働移動がはげしかったかがこれをみてわかるのであるが、この場合、すでに労働力の斡旋者、いわゆる労働ボスのような人々があらわれていることは注目に値する。アダム・ダグラス (Adam Douglas) という企業精神にとむスコットランド人が、マンチェスターのような綿業の中心地から、人口の稀薄な地方に建設された工場へ労働者を勧誘しており、企業家の方では、このような労働移動の傾向にたいして、かなり警戒的であったということができる。当時の労働力不足を一層ひどいものとした大きな原因は、ひとつには、

十八世紀末期綿工業を中心とする産業革命の主軸をなした産業においては、労働力は多くの場合教区徒弟から供給され、従って、一般の家庭は、工場を救貧院と同一視する傾向が強くなり、従って十九世紀になっても、一般労働者の工場にたいする抵抗はかなり根強いものがあつた。いまひとつは、やはりイギリスにおいても十八世紀末期の労働者は、半農半工的色彩が強くなり、たとえば、サミュエル・オールドノウの工場の場合、労働者にたいし、果樹園および菜園などを、いわば餌として、労働者をひきよせるために努力したといわれ

十九世紀初頭のイングランドにおける労働移動の現象について

る。

だが、いうまでもなく、十八世紀末期から十九世紀初頭にかけての工場制度の初期の段階だけでなく、かなり後までも救貧院は、工場主の見地からみて、労働力調達機関であつて、たんに工場主のみならず、救貧院の側でもこうした傾向をむしろおしすすめようとしたといわれる。つまり労働力の比較的豊富な工業都市、たとえばマンチェスターやグラスゴウなどにおいては、必ずしも教区徒弟を労働者として導入する必要はなかったのであるが、労働力が極度に不足していた新興産業地帯においては、大量の新鮮な労働力を一度に必要とする場合、都市の教区徒弟に依存しなければならなかったのであつて、その意味では、教区徒弟制度は、大都市から新興産業地帯への労働力移動をひきおこすひとつの要因でもあつた。しかしながら、このようないわゆる貧窮児童の雇用は、十八世紀末になると大きな社会問題となりはじめ、工場主による苛酷な搾取、非人道的な待遇と劣悪な労働諸条件とは、多くの識者、急進主義者の注目し難い難事となつて、一七九六年、マンチェスター保健委員会によつて工場における児童労働の問題にかんする決議がなされた。その結果として、歴史上はじめての近代的工場立法「徒弟の健康と風儀にかんする条令」が制定されることとなるのである。一八〇二年の工場法は、教区徒弟の代りに、自由な児童労働者を大量に工場に導入することとなるのであるが、しかし、産業革命のその後の進展は、ひとつにはその適用が綿紡績業に限定され、綿織物および毛織物などのいわゆる織物業は除外され、従つてそのもつとも盛んな地

方ヨークシアおよびチェンアにはほとんど影響を被らなかつたし、何よりも一八二五年以後、蒸気機関の大規模な導入が繊維産業全体の製造構造を大きく変革しつつあるという過程において、人口稠密な大都会への工場の集中の結果として、労働力の調達が比較的自由になるという現象、立法よりもはるかに大きな経済的必然性が、一八〇二年法を次第に廃止の方向に導いたといえよう。<sup>(8)</sup>「自由な」児童労働者の大量の発生は、多分に労働者家庭の家計補助的要求に関連するものであったが、蒸気機関の導入によって、工場の立地条件の変化と熟練成人労働力にたいする需要が急激に増加したため、不熟練労働力としての児童労働力にたいする需要は次第におとろえ、やがては相対的な過剰現象をさえ生ずるに至った。すなわち雇主は、一年もしくはそれ以上の期間と一定の週給をもって両親と雇用契約を結び、児童労働者を雇い、教区徒弟と並行して労働に従事させたのであるが、この場合、雇主は貧窮徒弟の定住の責任を避けるために、多くの場合、一年以内の契約を結ぶのが普通であった。このようにしてやがて両者は次第に混淆し、もしくは後者は前者にとって代られるに至るのであるが、職業によっては徒弟の過剰が訴えられたこともあったといわれる。<sup>(9)</sup>つまり、これらの教区徒弟は、十九世紀初頭は、主として綿工業に吸収されていったのであるが、そこにおける過剰現象があらわれるとともに、一八三三年の工場法以後、教区徒弟の本拠は石炭産業および金属産業に移るに至った。比較的後まで教区徒弟の制度が残存していたのは、シェフィールドの製鉄業およびスコットランド東部の釘製造業の間においてで

あったといわれる。<sup>(12)</sup>しかしこのような十九世紀初頭における教区徒弟の労働力としての需給関係は、労働移動によって決定的に重要なことではなかつた。一八三〇年代における綿工業を中心とする産業資本の確立を背景に、イングランドのマンチェスターおよびノッティンガム、スコットランドのグラスゴウおよびアイルランドのベルファーストの諸都市が、工業都市として重要な地位をしめるや、これらの諸都市を中心に、労働力の移動現象がきわめて活発になったのである。そこでそうした移動現象が、どのようにして行われたか、その点について追求することにしよう。

(1) George Unwin; Samuel Oldknow and the Arkwrights, the Industrial Revolution at Stockport and Marple, 1924, Manchester, 1924.

(2) Arthur Redford; Labour Migration in England, 1800—50, 1926, Manchester, p. 20.

(3) ロバート・オーエンは、かの有名な性格形成論を根幹とする社会主義的実験を行う前のデイヴィッド・デール氏経営のニュー・ラナーの労働力状態についてつぎのように書いているのは印象的である。「このころ、ニュー・ラナーの人々は、一家を構えて村に居住している約一、三〇〇人と、教区からえた四〇〇人から五〇〇人の貧しい子供とから成り立っていた。その子供達は五歳から十歳までくらいにみえたが、——七歳から十二歳迄と称せられていた。……そこで私は決心した。まずデール氏と諸教区との間に結ばれた

小児の雇用契約は廃棄すべきこと。この上、さらに貧乏人の子供をいれさせないこと。村の家屋や道路は改良させ、貧乏人の子供の代りに新たな家族を迎えるために、新しい、より善い家屋を建てること。また工場の内部は模様替えし、旧式機械は新式のに代えること。しかしこれらの変化は、段々に為されるべきもので、しかも工場が備からねばできぬことであつた」(Robert Owen; Autobiography, 1857, 邦訳、本位田祥男、五島茂共訳「自叙伝」、『世界古典文庫』上巻、一〇八—九頁、日本評論社、昭和二年。

(4) Redford; *ibid.*, p. 21.

(5) これについてはつぎのような事実が記されている。「一七九六年四月二十七日、ケントのアシュフォードの監督官は、年上の少年は十歳、もっとも若い方は九歳の児童で、二十一歳になるまで働く契約を結んだ二人の丈夫な身体をもつた少年を提供する住民のために、つぎのような手紙を書いた。「そしてもし彼らが、たくさんの金銭をもつても、別れることをあまり望まないときは、もしあなたさえ宜しければ、わたくしに、あなたの最低の条件とそしてまたこのようにして出された子供たちが、このような徒弟制度によって落ちつくものかどうかも知らせてくれ給え。」この手紙の下の方には、オールドノウが、この少年たちをつれていくのには、「二ギニーの貨幣のほかに、衣類と二枚のシャツが必要であることを記した筆蹟がある。十二カ月後、われわれは彼が、ロルズ救貧院(Rolls Workhouse)から子供をつれてきていたことを知る。そして一七九七年八月には、彼は少女の供給について持子養育院の委員会と連絡してつた。」(Unwin; *ibid.*, p. 172).

十九世紀初頭のイングランドにおける労働移動の現象について

(6) 一七八〇年代に、スピニング・ジェニーは、ヨークシアの毛織物業にも導入されたのであるが、これにたいする抵抗は意外に少なく、若干の例外を除けば、労働者や職人の反感や騒擾もあまりおこらなかつたといわれる。むしろ豊富な糸の供給によって毛織物業は隆昌にむかつたのであつたが、ただひとつその繁栄に暗い陰を投ずるものとして、「ハモンド夫妻は、『農業年鑑』(Annals of Agriculture)にのせられたグロースターの通信員によつてのべられたつぎのような記事を引用している。

「ヨークからきたひとりの紳士が、二、三日間、この都市を通りすぎたのであるが、彼はこの州の毛織物業の繁栄した状態について新しい確証をわれわれに与えてくれた。彼は、つぎのようにいっている。非常に多くの機械が建造され、しかも商売はそれによつて、この当時、七〇台の機械の追加がいまや、リーズ、ブラッドフォードおよびハッダースフィールドの近隣に建設されつつあるほどに発展した。だが、ある製造業者は、この紳士に、つぎのようなことを確信せしめた。つまりその製造業者は、ロンドンの救貧院から、自分の工場で働かせるために五〇〇人の貧しい子供たちを確保するという手段を、やむなくとらなければならぬほどの人手不足に悩まされているといふことであつた。」(J. L. Hammond and B. Hammond; The Skilled Labourer, 1760—1832, 1920, London, p. 150.)

(7) 一七九六年一月二十五日のマンチェスター保健委員会の決議には、つぎのように記されている。「○大規模な綿工場で働く子供たちやその他の労働者たちは、とりわけ熱病におかされやすい状態におかれており、このような熱病が、一旦うけいられるや、それ

and A. Harrison: A History of Factory Legislation, London, 1911, pp. 10-11.)

(8) これについては、戸塚秀夫「イギリス初期綿工場労働者の形成と展開——初期工場法成立史論序説としての一考察」(社会政策学会編「生産性向上と社会政策」所収)参照。および石畑良太郎「イギリス一八一九年工場法における立法者意識の問題点」(一橋論叢第四十六巻第四号)参照。

(9) 「機械装置は、労働者家族の全成員を労働市場に投じて、成年男子の労働力の価値を、彼の全家族の上に分割する」(マルクス「資本論」岩波文庫版第一巻第三分冊、一四六頁)。

(10) Retford: *Ibid.*, p. 26.

(11) *Ibid.*, pp. 27-28.

(12) *Ibid.*, p. 30.

二

繊維産業を中心とする産業革命の過程で、熟練労働力がいかにして調達されたかを知ることは容易なことではない。しばしば農村における困い込み運動によって故郷を追われた農民たち、没落させられた小生産者層および家内手工業者が、都市における労働力需要に応じたものであることが主張されるのであるが、これは果して正しいといえるだろうか。最近の研究によれば、マンチェスターやバーミンガムのような当時の大都市における人口増加——従ってそれは労働者人口の増加に密接な関係があるが——は、しばしば指摘され

は急速に伝染し、同じ部屋に密集している人々の間にひろがるばかりでなく、彼らの家族およびその隣人の間にひろがる。(9) 大工場制度というものは、たとえ特殊な病気が流行していないところでさえも、つぎのような理由から、そこで雇われている人々の体格に一般に有害である。つまり、密閉した状態で働くということ。熱さ、もしくは汚れた空気の身体を衰弱させるような影響から、そしてまた自然が、その制度を奨励し、人々の雇用と義務のために、われわれの種族に適するようにするためには、子供および青年たちに、必要欠くべからざるものであるところの体育というものが全く欠けているということ。(10) 子供にかんしては、夜間の不規則な労働および日中の長い労働というものは、大きくなりつつある世代の力を損い、その活力を破壊することによって、生活と勤勉の総量についての将来の期待を減少せしめる傾向があるのみならず、それはまたしばしば両親のなかに怠惰、放縦および不品行に刺戟を与える。彼らは自然の秩序に反して、彼らの子孫を虐げることによって生活しているのだ。(11) 工場で雇われている子供たちは、通常、教育や道徳もしくは宗教的訓育のあらゆる機会から遮断されているようにみえる。(12) 若干の綿工場に残っているすぐれた規則からすると、これらの害悪の多くは、かなりの程度に未然に防げるように思われる。それゆえわれわれは、経験によってつぎのようなことを正当とし且つ確信している。すなわち、われわれは、このような作業について、賢明な人間的なそして平等な政府のための一般的な法体系を確立するために、議会の援助を懇願することを提案することについて、これらの寛大な工場主の支持をえるであろう。(B. L. Hutchins

るように、農村からの流離という劇的な事件によるよりは、その都市内部における人口の自然増加、あるいはせいぜいその周辺からの流入であることが明らかにされている。だがそうであるとしても、産業革命期において、いわゆる新興産業都市におけるいちじるしい人口増加の現象を、たんにそうした事実に戻してしまふことは危険であつて、ランカシャー地方のみならず、その他の産業地帯に向つて動く労働者の流れに、何か特徴的な性格を見出さなければならぬ。アイルランド人で、しかも初期の綿紡績労働組合運動の指導者ジョン・ドハーティ (John Doherty) の生涯をみると、ひとつにはアイルランド人であること、いまひとつは、綿紡績工として転々と職場を変えていたという事実を象徴しているのであつて、十九世紀初頭における労働力の移動現象については、つぎのような仮設が成り立つのではなからうか。(一)綿工業を中心とする北部の大都市の急激な人口増加は、すでにいわば斜陽産業となりつつあつた職業の人々、たとえばリンネル織工、掛袴編み工、靴下編み工などの労働者が、その半農半工的な労働生活からくる低賃金、競争者として登場してきた綿業の機械化によって没落させられていき、その結果として紡績資本にとって豊富にして尽きせぬ労働力の給源となる。かくして、十八世紀末期から十九世紀初頭にかけての労働力移動は、産業革命の過程における賃金および労働条件についての産業間格差の拡大と密接な関係があること、(二)従つて、農村人口からの工業労働力としての形成、その陶冶の過程は、必ずしも無媒介的に行われたのではなく、むしろ農村家内工業、とりわけ手織工の没落を媒介に

十九世紀初頭のイングランドにおける労働移動の現象について

して、それを横杆としておこなわれたものであること。(三)それゆえ、労働移動は、ノッティンガムからヨークシアへ、レスターシアから、ミッドランズの石炭および鉄工業地帯へという経路を辿つた。四)しかも、もつとも注目すべきことは、アイルランドからの大量の移民であつて、彼らは、大部分、手織工として生活し、繊維産業資本にとっての搾取の対象となる。(四)初期の労働運動、とりわけチャーティズムにみられる急進主義は、このようなアイルランド出身の広はんな手織工の存在と無関係ではありえない。以上の仮設にもとづいて論述を進めることにする。

一八二五年以後、力織機の綿織物業における導入は、手織工の生活をいちじるしい苦境においやり、ついに、綿工場地帯に仕事を求めさせる結果となつたのであるが、とくに一八二六年から一八三三年までの間に、アイルランドの繊維産業地帯が、イングランドとの競争と恐慌のために破滅するという状態のなかで、イングランドに移住して手織工の数を異常に増大せしめ、彼らの生活条件を一層悪化せしめた。このようなアイルランド人の流入による影響は、毛織物業においても深刻な波紋を投じつつあつた。

毛織物業の中心としてのノーウィッチおよびブリistolなどの地方は、一八一〇年代においてはかなり繁栄していたのであるが、一八二〇年代における毛織物業への力織機の導入によって、はげしい窮乏化に見舞われた。このような機械化は、ヨークシア地方を中心として進展した結果、一八三〇年から四〇年の間に、グロースター、ノーマーセット、ウイルトンおよびデイヴォンの諸州は毛織物

業における競争に敗北し、その結果は、この南西諸州の人口は激減し、十九世紀の半ばまでにそれらの南西部諸州からの人口の流出がつつき、一八二一年から一八五一年までの間にそれらの諸州の人口は半減したといわれる。これらの人口の多くの部分が、綿工業地帯、ランカシア地方および毛織業の中心地ヨークシア地方およびその周辺の諸地域へ流れこんだものと思われる。リーズ、ブラッドフォード、ハリファックスおよびハッダースフィールドなどの諸都市は、十九世紀を通じて、絶えず人口が増加し、とくにブラッドフォードの如きは、一八〇一年から一八五一年までの間に、実に八倍の人口増加をみたといわれる。レッドフォードは、南西部諸州における人口の激減、従ってまた工業人口の減少は、たんに北部のヨークシア地方への移動を意味するのではなく、そのもつとも大きな部分<sup>(5)</sup>は、海を越えて外国にわたり、さらにロンドンのような大都会へ、あるいはサウス・ウェールズの石炭および製鉄業にも向ったことを強調しているが、ただこの場合、クラフトの伝統の根強い毛織物業において、労働力移動が容易に行われたが、この問題はきわめて重要であるが、レッドフォードはあまりふれていない。

しかもこのような一部の都市における人口の急増は、リンネルの国内工業の綿工業による駆逐による衰亡によって、一層拍車をかけられた。綿製品の価格の下落と販路の拡大によって、一七七〇年から八〇年代にかけて、ランカシアにおけるリンネル製造業は急速に衰え、従って北アイルランドのリンネル工業も破滅したため、その手織工は主としてマンチェスターを中心にランカシア地方に流出

し、底知れぬ低賃金の温床となった。スコットランド北西部のいわゆるハイランド地方のリンネル織工もまたこのような失業者群として、マンチェスター周辺の紡績工場地帯に職を求めたといわれる。こうした手織工と同じく、この時期に悲惨な状態に追いやられたのは、掛袴編み工やノッティンガムおよびレスターシアの靴下編み工、レース編み工などであって、従ってこれらの地方も、労働者の移動によって、人口は次第に失われていった。ノッティンガムからヨークシア地方へ、レスターシアからはミッドランドの石炭および製鉄地帯もしくはロンドンへというように、手織工たちは移動したのであった。しかし注目すべきことは、絹織物業の場合には、十九世紀後期まで、力織機は応用されず、従ってそこが手織工たちの避難所となり、それゆえまたのちに貧窮の泥沼となったことである。一八一五年頃のマンチェスターには、一〇、〇〇〇人の絹織工がいたといわれるが、彼らはもと手織工であったし、一八三〇年代ロンドンのスピタルフィールドには、約五、〇〇〇人の絹織工がいたといわれる。

労働力の移動は、たんに繊維産業を中心として行われただけでなく、石炭業や製鉄業の場合にも、かなりはげしかった。産業革命が、蒸気機関の繊維産業への導入をもつてはじめられたことは、同時に、「石炭と鉄との融合」をも意味していた。炭坑労働者や製鉄工が、どのようにして労働力を獲得していたか。イギリスにおける古くからの炭坑地帯としては、④ウエスト・ミッドランド(とくに南スタッフフォードシア)、⑤ダーラムおよびノーサンバーランド、⑥

サウス・ウェールズなどが主要な中心地としてあげられるのであるが、この場合、④はいわゆるブラック・カントリの製鉄製鋼業にエネルギーを供給し、これと離れた結びついており、また⑤は、むしろ鉄鋼業の中心地として開けたところであり、石炭業に重要な地位をしめたのは十八世紀後期になってからであった。純粹な炭田としてはむしろダーラム、ノーサンバーランドの方が典型的であった。しかしこのような条件の相違にもかかわらず、労働力の移動は、この産業においては、特殊な相貌を呈した。すなわち、当時の採炭技術の幼稚、保安設備の不完全、炭塵爆発による災害の危険性などによって、新規の労働力を得ることはかなり困難であり、また炭坑主は、ひとつの炭坑に長期且つ巨額の設備投資を行うよりは、新しい坑を掘ることを有利と考えていたので、労働移動についても明確な把握が困難であったといわれる。炭坑夫人口の増大は、それゆえ、外部の諸階級からの補充によるよりは、自己の階級内の再生産を基本としていたといえることができる。当時、採鉛工は、採鉛業の没落によって窮乏化し、ダービシアの採鉛工はランカシアやシェシアの繊維産業へ、スタッフフォードシアの炭坑へ、あるいはまた南ヨークシアの鉄鉱山へ流出した。

ダーラムおよびノーサンバーランドの採鉛夫の賃金は異常に安く、炭坑夫の約半分であったといわれ、窮乏化した彼らは、多くはアメリカへ移住し、時としてその一部の者は、炭坑労働者のストライキに、スト破りとして利用されたのであって、一八三二年のダーラムのストライキにおける場合などはそれである。採鉛業からだけ

十九世紀初頭のイングランドにおける労働移動の現象について

でなく、石炭業は他の多くの産業から労働者を吸収したのであって、不況のときのプリストルのフェルト帽製造業、飢餓に類しつつあった手織工、ヨークシアのリンネル織工などであって、とくに一八三三年の工場法が、工場における児童の使用についてきびしい制限を加えたとき、零落した手織工は、彼らの子供たちを炭坑におくったのである。しかし一般に炭坑は、労働条件が異常に悪く、何よりもアイルランド人の多いことが、労働者をして躊躇せしめたとい<sup>(12)</sup>う。製鉄業が木炭を燃料とする形態から、石炭を主要燃料とするものへの変化の過程において、製鉄業の中心地は、ウィルトシア、デイヴォンシアの南部諸州から中西部のシュロップシアへ、そしてさらに石炭の豊富なバリーミンガム周辺、サウス・ウェールズおよびシエフィールド周辺へうつった。従って労働力も、エセックス、ヒアフォード、ソマーセットおよびグロースターなどの南部諸州からシュロップシアをへて、さらに北部へ移動したため、シュロップシアは、労働力人口の集中と分散の中心地となり、製鉄業の景気の好凶によって、その人口は増減したといわれる。産業革命期における労働力移動の問題を考える場合に、ひとつは、農業から手織業へ、手織業から綿紡績業へ、あるいは手織業から石炭業あるいは製鉄業へ、靴下編み、掛袴編みあるいは絹織物業から綿紡績もしくは石炭および製鉄業というように、さまざまなコースが考えられるのだが、この場合、旧来のクラフト的伝統がかなりの程度にわたってこれを阻止し、その移動を制約したと思われる、そのような規制も産業の性格の相違によって、強弱があったはずであるが、この点につい

ては、レッドフォードはほとんどふれず、むしろ、そうした制約から自由なアイルランドおよびスコットランド人の移動現象について、克明にふれている。ではつぎに、アイルランドおよびスコットランドの労働者の移動現象がどのようにして行われたかを考察することにしよう。

(1) これについては、大塚久雄「総動運動と農村工業——イギリス経済史上における工業と土地制度との交渉の一面」、小野武夫博士選歴記念論文集刊行会編「西洋農業経済史研究」(日本評論社)昭和二十三年、参照。

(2) これについては、J. D. Chambers: Population Change in a Provincial Town; Nottingham 1700—1800, (Studies in the Industrial Revolution, edited by L. S. Pressnell, 1960, London) が参考になる。

(3) シドニー・ウェップ夫妻は、ジョン・ドハーティについて、つぎのようにのべている。「フランス・ブレースによって、やや性急なローマン・カトリックとして描写されたジョン・ドハーティは、一七九九年にアイルランドに生まれたが、同時代の労働者の中ではもっとも鋭い思想家であり、たくましい指導者であった。そして十歳のときにすでにアントリム州ラインヌの綿工場へ仕事に入った。一八一六年、彼は、マンチェスターへ移住し、そこで急速に指導的な労働組合主義者のひとりとなり、しかも地方的な綿紡績工の組合の書記となった。われわれは、彼がたとえ、一八二五年の団結禁止法の再制定の提案にたいする反対運動において、卓越した役

三

産業革命期における北部の人口の激増は、南部および東部から北部へ移動という、国内移動によつてもたらされたものであるよりは、ランカンシアの場合などはむしろ人口の流入は周辺の諸州からであり、その意味において、もっとも大きな役割を果たしたのは、アイルランド人であった。たとえば、マンチェスターへの長期の移民は、アイルランドおよびスコットランドからの人々が多かったといわれる<sup>(1)</sup>。また当時のグラスゴウの人口をみるに、土着の住民五分の一、スコットランド低地人五分の二、高地人五分の一、アイルランド人五分の一であったといわれる<sup>(2)</sup>。一八二一年から三一年までのこの国の都市の異常な増大は、南部から北部への移動によるものではなく、その周辺の農村地帯から集まってきたものである。そこには靴屋や洋服屋が飢えに類した手織工やのろまな農民と肩をならべるという状態のなかで、ナポレオン戦後の一世代は、農業は、工業都市の労働者にとっては、希望のもてる予備地帯であった。労働者階級の急進主義者ウィリアム・コベットは、農村人口のはげしい減少について訴えているが、しかし工場労働者は、南部からよりはむしろ周辺の農村から供給される場合が多く、製造業および炭坑業地帯においては労働力が不足し、周辺の農村からは短期的に労働力が流入するという半農半工型の賃労働の現象が少なくとも一八三〇年代頃までは支配的であった。従つて南部の農村地帯においては広はんな過剰人口が存在していたのに、北部の農村では、農業労働力が周

十九世紀初頭のイングランドにおける労働移動の現象について

割を果すのを知っている。彼が一八二八年か一八二六年の博愛協会もしくはゼネラル・ユニオンに関係があったかどうか、われわれは知らない。一八二九年には、賃金きり下げに反対するハイドの紡績工の大ストライキを組織し、このテキストでのべられているように、ひきつづき紡績連合組合および労働擁護全国連盟の常任書記となった。そのポストで彼は、たしかではないけれども、年六〇〇ポンドという巨額の俸給をうけたといわれる……。一八三八年彼が、マンチェスターで印刷屋および本屋になったとき、労働者の団結にかんする専門委員会において、紡績工の組織やストライキについて「G. and B. Webb; History of Trade Unionism, 1920. pp. 117—118.)

- (4) Redford; *ibid.*, p. 40.
- (5) Redford; *ibid.*, p. 41.
- (6) *Ibid.*, pp. 42—43.
- (7) *Ibid.*, p. 44.
- (8) J. L. Hammond and Barbara; *The Skilled Labourer 1760—1832*, 1920, London, p. 221f.
- (9) Redford; *ibid.*, pp. 46—47.
- (10) Redford, p. 49.
- (11) Hammond; *ibid.*, pp. 37—38.
- (12) Redford; *ibid.*, p. 51.
- (13) *Ibid.*, p. 52.

辺の工業都市に吸引されて、労働力が不足し、農業労働における高賃金という現象がみられたといわれる。

それでは何故にそのような現象がおこったのかといえ、ナポレオン戦後の農業経営の相対的不振、復員軍人の流入による過剰人口のなかで、イングランドの南部は貧民が増加し、救貧法、いわゆる院外救助法の適用をうける農民が、圧倒的に多かった。院外救助はまた雇主の間に低賃金政策をよびおこし、労働者はますます窮乏のなかに落ち込んでいくという悪循環が一般的であった。とりわけ救貧法は、貧民にたいして定住を要求したため、農村地帯における広はんな過剰人口が存在するにもかかわらず、都市への移動が妨げられ、都市には労働力が不足するという現象がおこったのである。院外救助法によつて、労働者がますます深い泥沼に沈淪させられたのは、ノーフォーク、サフォーク、ハンティンドン、ベッドフォード、バッキンガム、サリー、ドーセット、ウィルツおよびデヴォンであったといわれ、これらの諸地域の農業労働者は、北部へ移動するには、面倒な手続を必要としたのであつて、その意味においては、アイルランド人の移動のほうがはるかに簡単であった。ここに十九世紀のイングランドにおける労働力構成において、アイルランド人が重大な役割を果す客観的な理由があつた。

労働力不足は、一八三〇年以後、繊維産業の活況がつづき、労働運動は活発となり、賃金がますます上昇するなかで、もっとも痛切に感じられた。ランカンシアの綿業、ウェスト・ライディングの毛織物業、建築業における異常な活況と一八三三年の工場法による児童

労働の制限がこれに拍車をかけた。労働力の不足は、町よりも田園地帯においても甚だしかったといわれる。すなわち、当時すでに田園地帯の工場においても蒸気機関の採用が目立ってきており、とくに一八二五年の不況以後、旧式の紡績工場は崩壊し、同一の工場で、紡績と機械とが同時に並行しておこなわれるという近代的な工場制度が一般的となり、一八三五年から三八八以後、ランカシアおよびチェンヤにおいて労働力の急激な増加がよびおこされた<sup>(4)</sup>。そうしてこのような労働力の緊急の需要に応じてアイルランド人がイングランドに流入するのであるが、とくに一八四〇年代におけるアイルランドの飢饉がこれに密接な関係を有するものであることはいうまでもない。

十八世紀の末までは、アイルランド人の移民は、イングランドにおいて、とくに問題にはならなかった。それはまだ季節労働者としてスコットランド人およびウェールズ人などとともに労働力需要に応ずるものであったし、一七七四年、ノーフォーク、ハートフォードシアなどの農業地帯においては、取り入れはアイルランド人によって行われ、ハンティンドン、ベッドフォードおよびケンブリッジにおいては、農民は、その労働力を渡り歩くアイルランド人もしくは、ランカンアの工業労働者に依存していたといわれる<sup>(5)</sup>。すなわちここでも不況時代には、労働者は、相対的過剰人口として農村にその労働力の販売先を見出したのであって、いわゆる「半農半工型」賃労働は、必ずしもわが国のみの特異な現象ではなかったことは注意されなければならない。

に、イングランドにおいては、アイルランド人もスコットランド人も、ともにわずか六週間の滞在によってえられたことも、彼らの流入を誘引し容易にした理由でもあった。

またアイルランド人のイングランドにおける放浪の場合には、通常二つの方法が考えられたのであって、(一)プリストル、ミルフォード・ヘイヴン、ニューポートおよびサウス・ウェールズに上陸して、そこからロンドンに至るもの、(二)リヴァプールやホーリヘッドから出発してロンドンに行く場合であって、またスコットランドの放浪者は、一般に、サリー、ハンブリア、ドーセット、デイヴォンなどの南部の農業諸州に根拠をもち、家畜をつれて歩くスコットランド人は、ロンドンの市場でこれを売ろうとする。そのほかウェールズ人もやはり、イングランドを横切って東漸したといわれる<sup>(8)</sup>。

一八二三年頃から十年間、アイルランドからの移民は激増し、乞食や季節労働者のほかに、大都市に移住する多数の貧民を含んでいた。この時期に、プリストルやリヴァプールを通じて移動するアイルランド人は激増し、サウス・ウェールズ、ハーフオドシア、モンマウスシアは、ミルフォード・ヘイヴン、プリストルおよびニューポートからロンドンへ流入しようとするアイルランド人によって満ち溢れたといわれる<sup>(9)</sup>。いうまでもなく、これらのアイルランド人の流入は、イングランドの景気の好凶によって左右されたのであるが、それと同時に、アイルランドの経済的な諸条件、たとえば凶作、飢饉、耕作方法の変化によって、より根本的には、イギリス政府の苛酷な植民地政策によって大きな影響をうけたのである。とくに一

十九世紀初頭のイングランドにおける労働移動の現象について

一七八二年、アイルランドとスコットランドにおけるはげしい飢饉以来、イングランドへの労働人口の流入は活発となり、十八世紀の終りにはスコットランドからイングランド、とくにロンドンへ、「二〇、〇〇〇人の職人大工、パン焼き職人、庭師および仕立工等が移ってきた<sup>(6)</sup>」といわれ、また一七七五年、ノーウィッチでは「スコットランド人協会」(Scots Society)が組織され、リヴァプールには、スコットランド人が密集していたといわれる。しかし、一般に、スコットランドの移民について知られることが少ないのは、救貧法の適用をうける貧困者がアイルランド人に比べて少なかったからであって、掛棒編み工のなかにはかなり窮乏化した者もあったが、あまり顕在化しなかったことによつていたといわれる。

これに反し、アイルランドの場合には、ローマ・カトリックの信仰、救貧法の欠如、これらの諸条件は、托鉢、乞食を奨励する結果となつた。スコットランドにおいては救貧法は偶発的な貧窮にたいして十分に効果ある対策たりえなかつたのだが、イングランドの場合には、一八三四年までは、比較的寛大な院外救助制度が存在したため、アイルランド人およびスコットランド人の流入がひどくなつた。ロンドンの二、〇〇〇人の乞食のうち、三分の一はアイルランド人であつたといわれる。スコットランドと境を接するカンバールランドは、スコットランド人とアイルランド人の流入により財政が極度に苦しくなり、国境周辺のある教区では、救貧税はスコットランドの教区の約五倍に達したといわれる<sup>(7)</sup>。またスコットランドでは、居住権は、一定の場所に三年間継続して住まなければえられなかつたの

八一五年以後、アイルランドの地主は、穀物中心の農耕地よりも牧畜を有利と考え、耕地の牧草への転換をはかつた結果、農業労働者は解雇されたのみならず、多くの借地農が消滅し、その結果としてイングランドへの移民が激増し、しかも一八二〇年代の飢饉は、その傾向を一層強めたのである。かくしてイングランドの労働市場に放り出されたアイルランド人労働者は、イングランドにおける都市と農村との、工業と農業との変転する経済的諸関係に全く一方的に依存することとなつた。

だが、アイルランドからのイギリス本土への移民は、たんに工業労働力のためだけではなかつた。いわゆる「収穫労働者」(harvesters)としての季節労働者は、(a)マンスター地方からプリストルへ、(b)コンノート地方からリヴァプールへ、(c)アルスター地方からスコットランドへというように全土にひろがったと考えられる。それでは一体どのようにして流浪して歩くアイルランド人は、最後にどのようなところにおちつき、且つそれはどのような影響を与えたであろうか。

アイルランド人労働者は、たとえば建築業における低い段階の仕事、道路建設、運河の開削、港湾建設、船艦の建造などに従事したのであつた。鉄道建設業のような場合は、イングランド人労働者によつて占められたのであつて、彼らの主要な流れは、主として繊維産業に向うのであつて、とくに手織工のなかで圧倒的な地位を占めた。いうまでもなく、アイルランド人労働者の多くが手織工となつたという事実の背景には、一八三〇年までに、すでに頻死の状態に

あつたアイルランドの民族的産業としての綿業があつたのであり、その状態はやがて毛織物業にまで及んだ。一八二一年から三一年までの十年間に、ダブリン市の大きな三〇の毛織物の工場が倒産、絹織物業の悲劇、ダブリンの絹織物工場のイングランドの繊維産業との競争と敗北、その衰滅のなかで、アイルランドの手織工は、イングランドに渡らざるをえなくなったのである。

いうまでもなく、アイルランド人の大量の移民は、イギリス労働者の賃金をおし下げる結果となる。低賃金の温床、労働者の連帯をうちこわすアイルランド人、彼らの多くは、アメリカへ渡る手段として、一時イングランドに滞在し、旅費を稼いだといわれる。しばしばストライキ破りに利用されたことも少なくなかった。一八三四年の統計によれば、アイルランド人の拡散居住は、①ランカンシア地方、②グラスゴウ、③ロンドンであつた。ランカンシア地方は大ブリティンのアイルランド総人口の約四分の一、イングランドに居住するアイルランド人の三分の一、主として大工業に蝟集していた。このようにして初期のイギリス労働者階級のなかで特異な存在であつたアイルランド人の移動は、十九世紀初頭におけるイギリスの労働移動現象を、きわめて異色あるものたらしめたのである。

要するにわれわれは、産業革命期のイギリスにおいても、わが国にみられたような「半農半工的」な賃労働の類型をみる事ができるし、低賃金の温床としてのアイルランド人労働者の大量の流入を考へるとき、このように賃金をおし下げる強力な要因が一方に働きつつありながら、全体としてイギリス労働者階級の賃金が次第に高く

なりつつあつたのは何故か、この原因を深く考える必要があるのではなからうか。労働移動の自由が、産業資本主義の確立のなかで、ますます明確になつたという事実、それが何に由来するものか、この点を考察することこそ重要であらう。

卒直にいつて、現在のわが国には、この産業革命期のイングランドにみられるような事象が存在するのではなからうか。明治維新以後百年にして、われわれは深刻な労働力不足の現象を体験しつつある。けれどもそのようななかで、依然として低賃金状態がなお強固に根をはり、簡単に解決しそうにもみえない。いわゆる二重構造の問題にしても、これを固定的ないしは宿命的に考えるのではなく、現実の日本資本主義の発展という動態的な把握のなかで考察されなければならぬ。

レッドフォードの研究は、アイルランド人労働者の移動に力点をおいているために、熟練職種と不熟練職種との労働力の移動、あるいは同一職種内での移動についてはほとんどふれておらず、とくにこの時代に基盤をかためつつあつた全国的なクラフト・ユニオンとの関係についての分析をまったく抛棄している点などが最大の弱点である。だが、ともかくこうしたはげしい移動を経験してはじめて、イギリス職能別組合は鞏固な地盤を獲得し、ついに、一八六〇年代における労働市場の完全なコントロールを実現したものであることを考へるとき、われわれは現在のわが国の経済における不安定的な要素、労働力とくに若年労働力の絶対的不足と中高年齢層における過剰現象、規模別賃金格差の問題、農村人口の減少など、これらが、

わが国の労働組合運動の組織にも大きな影響を及ぼさざるをえないことは当然であると思う。経済学における歴史のメリットも、このような点に求められるべきであらう。

- (1) Paul Mantoux: *The Industrial Revolution in the Eighteenth Century, An Outline of the Beginnings of the Modern Factory System in England*, translated by M. Vernon, 1928, London, p. 367.  
ポール・マントウ「産業革命」徳増・井上・遠藤共訳(東洋経済新報社、昭和三九年)五〇二頁。  
(2) Redford: *ibid.*, p. 57.  
(3) William Cobbett: *Rural Rides*, 1858, London, October 31 and

November 24th, 1822, September 4th, 1826.

- (4) Redford: *ibid.*, pp. 88—89.  
(5) Wilhelm Hasbach: *History of the English Agricultural Labour*,  
rer, 1908, p. 82.  
(6) Redford, p. 116.  
(7) Redford, p. 119.  
(8) Redford, p. 121.  
(9) *Ibid.*, p. 121.  
(10) *Ibid.*, pp. 124—129.

—一九六四・一一・二五 深更—